# 芭蕉菊繪詞傳 中

和書門
類 二八四四二號
函 八三
架 一二
冊 三

内閣文庫
和書
類 二八四四二號
冊 三
函 五八
架 一八

内閣文庫
番號 和 28442
冊數 3 ( 2 )
函號 158 405

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

明治十五年購求

貞享五辰年〳〵伊勢に来りおこなふ

春をてまつ日乃明山うたふ

阿波ゝ乃大佛ふまつてゝ参宮

無七の人〳〵ゝ俳諧乃発句

東大寺ゝ乃ゝ俊乗上人ゝ乃勧化なり仁王

護摩乃あふ法ゝ乃ゝ座ふ乃ゝ所ゝ乃ゝ

以もゝゝふ宝礎ゝ乃ゝ

如ゝふ三界ゝ〳〵ゝ

若尊寺文書

桜子は庭にならへいますし苦は孫をみて世の法佛を
うつるさまをみてあはれに深くしのび現然に
拝し給ひ懐妊ありし上人は深く新しく以ますまで
をもて抄はしをし倩るそ無世の名は疑ふ
何なく識りて古くら人の心にも貴しむる上々の
御願いまらつらんになふ待るて是は悲しく涙も落
そふも物語ともし云ふば石動に参つては
丈とりなげうふ高し居のうへ



苅萱絵詞伝

探丸子別墅の牡丹もよろし後ひらるる

丁卯夏まひて

ちるまゝにおもひ出る櫻かな

愚桜良長成人の後別号を探丸といふ蕉翁と宗房と同時の忠節をおほし生て世にあらはれし時とそこの白髪一世ありしかの翁の孫なる侍ハべりとて

参河の杜国をまゝ

昊しらひ初潮の花

ゆ〻しさ雪にこるゆ〻しさ

けしよるなる舟の多さ





御に〻て西の乃枝折ゝまゝ

とれハ〻ゆ〻しさ

やまとにかへるとて

ういなゝ

古文書同書

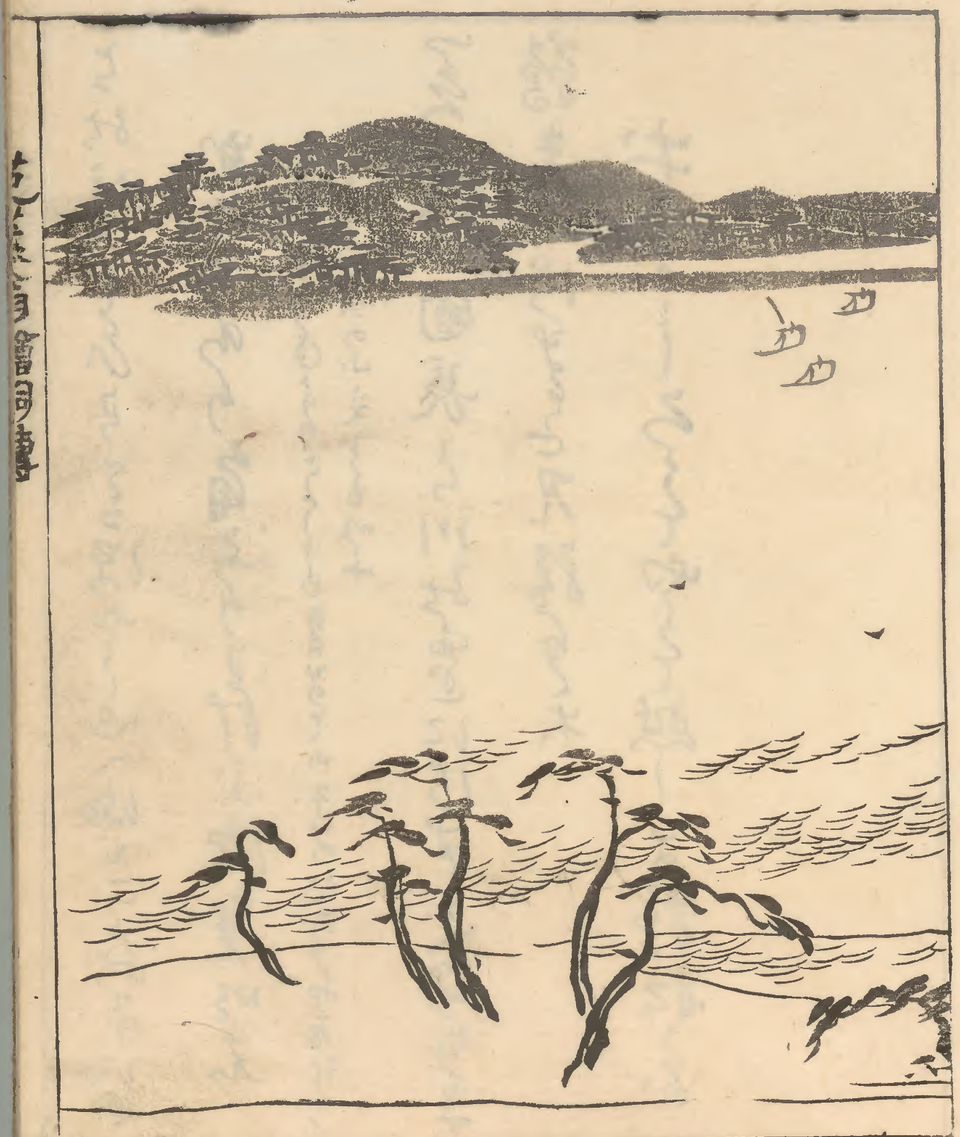
国立公文書館
National Archives of Japan

これより須磨に遊ひ給ふ空もおほろに
残れるはかなきみしか夜の月もいとゝ艶なる哉

月見ても物たらはすや須磨の夏

東須磨西須磨濱須磨と三所にわかれて
あなかちに何わさするとも見えす藻しほたれ
つゝなと歌にも聞え侍るも今はかゝるわさする
なとも見えすきすこといふうをゝ網して真砂の
上にほしちらしけるを烏のつかみ去るを
にくみて弓をもておとすそ海士のわさとも見えす
もし古戦場の名残をとゝめてかゝる事を
なすにやといとゝ罪ふかし

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ



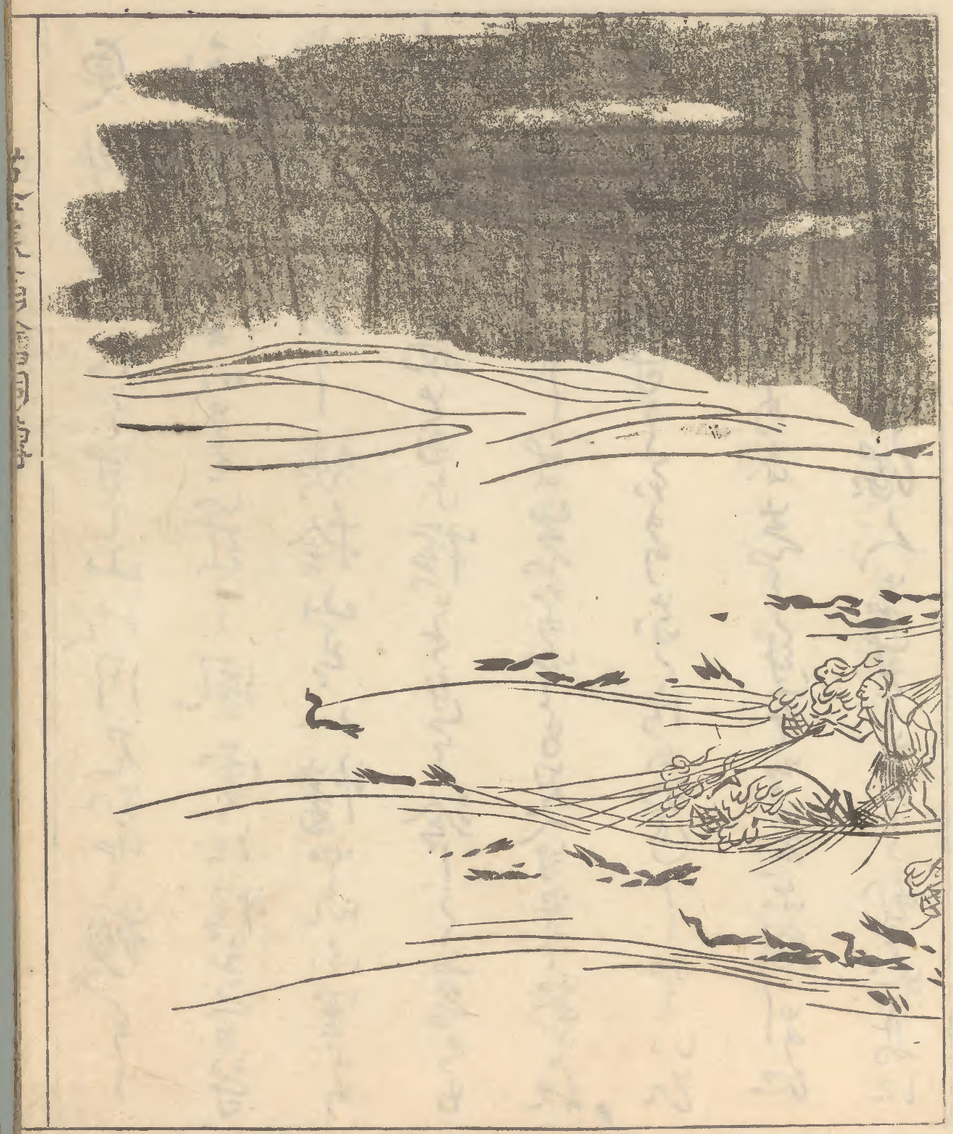
ちかい境をひらくる法門にはいかなる法もこれに漏れたつるなり角ふり月より次農時なり

愚按ずるに此の夏至の日の記あり和歌記りとも筑のふ文とも此ふ

長沢川みなもにはちすはへありまた

弱者ふはちすと見給ふ大

おもふ〜ろてやて然〜よ移紅葉



国立公文書館
National Archives of Japan

更科の里にて山より月見むと頻りに
秋風に心みだるる笠て風雲に情をうる寺
ゆゑ捨難き姨捨山に八幡宮ふる里より
南に五里西に五里に桂をまとひて冷々と宮もも
あるすがたなり月なかなかも見へすきあるれ
ばうき山なりすくなかりしかいひ
ようもなくもらりに出てうるに月はまに
何ゆゑにか先ふ人をまてまるむとなるに

月と風とにあるれハ
面影や姨ひとり泣月に友

国立公文書館
National Archives of Japan

元禄二己巳年八月江戸を出て奥羽の旅に
こゝろざす事、年乃終りおもひ立ける
元日より四日まで日々に
立てゐる雪あるに白川の関こえんと
我も物ふつき侍て心をなるはせ水なるも手に
つるまでひきたゆまぬ名をつゞりなを絃つけうへて
松島の月まつ心に笑ひ良に出るに彩をなす
へて杜新水に勇をなすこゝろ枕にあり潟乃





脚をもにせむるを悦ひ思ふ羈旅に難をも
いとはゝ〜ゆ〜といふ
乃野に那須野を行ふ野飼の馬あり
多刈おきになげ紀よ我ハ野生ゆへ無法に
情〜なふふあて此野生ハ縦横ふられてうひく
〜笑旅人に道ふゝへ安や〜ゆ〜ゆれい
此馬に野〜ゆ源西にてゐるを知へし後へ此〜
待ぬ内ちゆきも馬に旅をとゝひて

さゝ原に小姫ぞ名をかくまかれいるふ
妙なれば名はやはらしやさゝ原ふる

心もとなき日数かさなるまゝに白川の関にかゝりて
旅心さだまりぬいかで都へ便もとめしも
ことわり也中にも此関は三関の一にして風騒の
人心をとゞむ秋風を耳に残し紅葉を俤に
しのびて青葉の梢なほあはれなり卯の花の白妙に
茨の花の咲そひて雪にもこゆる心地ぞする
古人冠を正し衣裳を改し事など清輔の筆にも
とゞめしこの関いまにこえゆるやと人の心ぞ





風流の初やおくの田植うた

志のふもち摺の石を尋て忍ふの里を過け入路ふ示
山陰ふ石なかハ土に埋てあり里の童への教しへ
けるハむかしハ此山の上に有けるを往来の
人の麦くさをあらして此石を試ミ侍るを
にくミて此谷へ落せハ石の面下さまにふしたりと云

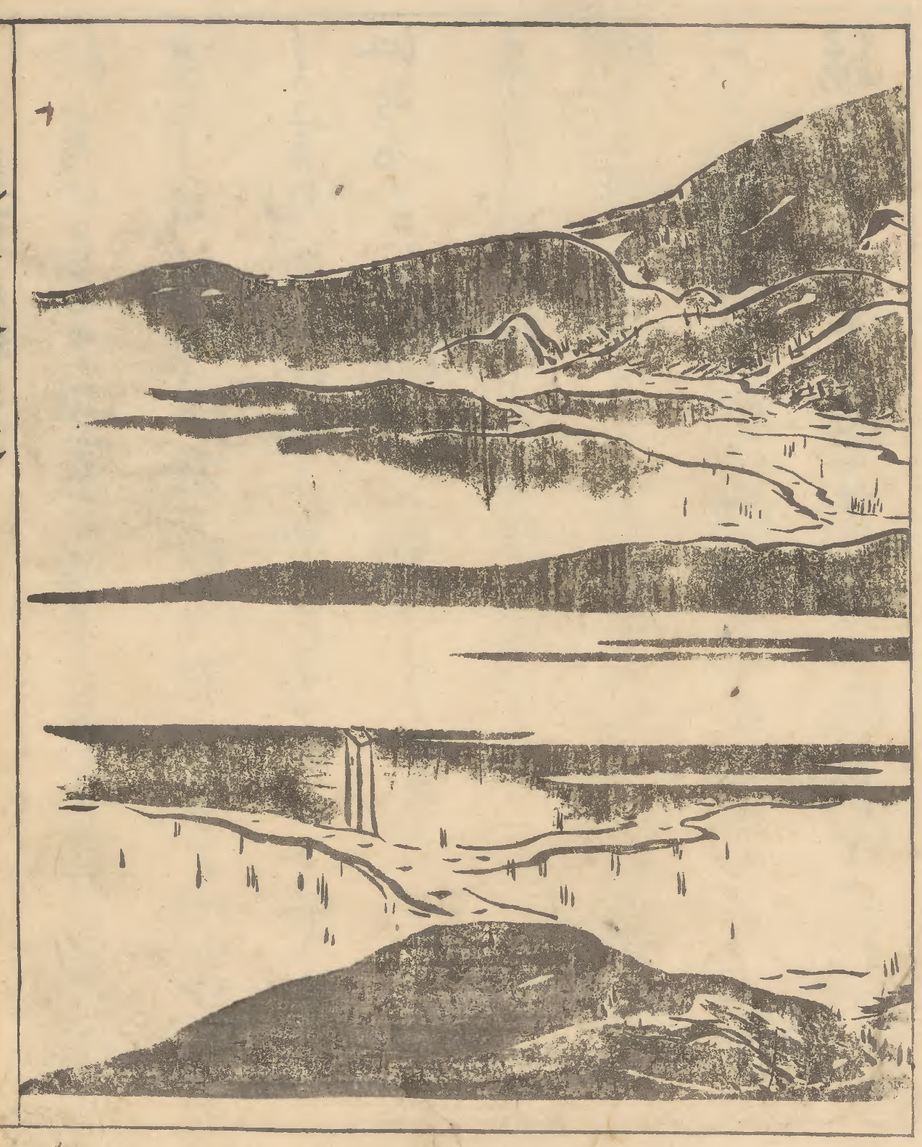
早苗とる手もとやむかし志のふ摺

武隈の松にいたりて目覚る心地すれ根ハ土際より
二木に分れて昔の姿うしなハすと志らるゝ也



能因法師おもひいつ往昔むつの守にて下りし
人この木を伐て名取川の橋杭にせられたる事
あれハにや松ハ此たひ跡もなしとハ詠たり
代々あるハ伐あるひハ植つきなとせしと聞に
今将千載乃かたちとゝのほひてめてたき松乃
けしきになんありし　桜より松ハ二木を三月越し
つほの石ふミハ高ハ六尺余横三尺はかりか
苔を穿て文字幽なり昔よりよみおける歌枕

多く語つてふとゝへと毎山家社川家て生あ〻ぎとゝ
所を堅もまて〻去にかゝれ木ハ老て家木に智〻れハ
ゝゝ記ゝ〻ゝ〻ぬるゝとゝに色ゝてゝゝひなし紀
千年乃如ゝゝみを昭君に古人ゝゝゝゝと聞すゝ御社
風春ゝゝゝゝゝゝ羈旅ゝ常ゝゝ忘れ〻憂ゝ感る
ゝゝ行ゝゝゝ書ゝひゝる



松嶋に月もよりて雄嶋の磯につきもてて其景を
書つゝ絵給ふ　松島や鶴も舞ふべき所かな
〻て凡洞庭西湖を恥ず　東より海を入て
江ゝ三里に塩竈の浦　江ゝ潮をくゝむ出入の数を
見て　千賀の浦　波こゆる所にわれ
あり　扶桑国の境　緑こゆる枝葉　花ふる風
雨　中十九



屈曲　形のごとくにして　自然を
して　美人　顔を粧ふ　所　詩
学　大山　造化
天工　人　筆　及ぶ

国立公文書館
National Archives of Japan

出羽の國月山にのぼり給ふ道すがら木陰しめりに引うけ、
雲霧の領ゝ強力とゝもに雨に霧
山氣の中に冰ゝとして登るゝ星ゝかな
雲の峰いくつ崩て月の出

永源寺の東に真砂を以て雨樋をなし雨樋の
ある海辺山うくるに雨を受ては晴色をあら
はし久遠寺に珠を以て雨は晴雪をあら
待ては朝天より霽雪に永源寺
船をつくりふなつなぎ国分に船をよせて
通路をひらくひむかふ岸にあるひをとれい
花はとめくれ櫻は先まづ西り法華の
はなをとる南うら海山天をかくしたり





義つまて江にあり西はむかしは
ちかく堤をつくり秋田にて通ふ
はなを望て浪うち入るを汐こしといふ江は縦横
つまをつゝみ面に松を山にあひて
松の山ハ矣ふるとく永源寺にむこう
はたけ出て地勢説をなす
ものゝ如くあり
永源寺の西ハ西施の海ふ乃ゝ

北陸道を経て越後の国出雲崎にて
月をもてしるべとふね佐渡の島へ海面十八里東西
三十六里の境なり北へ此島ハ長サ五里ばかり出て
出て海の中ハ山なれハ木なきゆゑ木をもて
舟をつくりて往来ス大船小船数万艘海
せゝるにより出来りしき名ハ此へあらも
知ずよく窟ひゝきて暫の旅愁をなぐさ
ハゝんとするゝ日既に海に沈て月ハ
銀河半天にうかめて星きらゝ〳〵ふく冴たるゝ浦ハ
うなりて波のうちよせハひたゝ〳〵砕けるのみにて
猶ちきれてそゝに出し
あゝ海や佐渡に横ふあまの河
一ふりの雨にやうやく折ふしの秋の親ちゝ
なるゝ中ハ山ハ国つゝきにて後ハ
枕引よせ寐るなり宿ハ一皆ちゝ　ゝ　如ち
ゝ　ゝ　ハゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

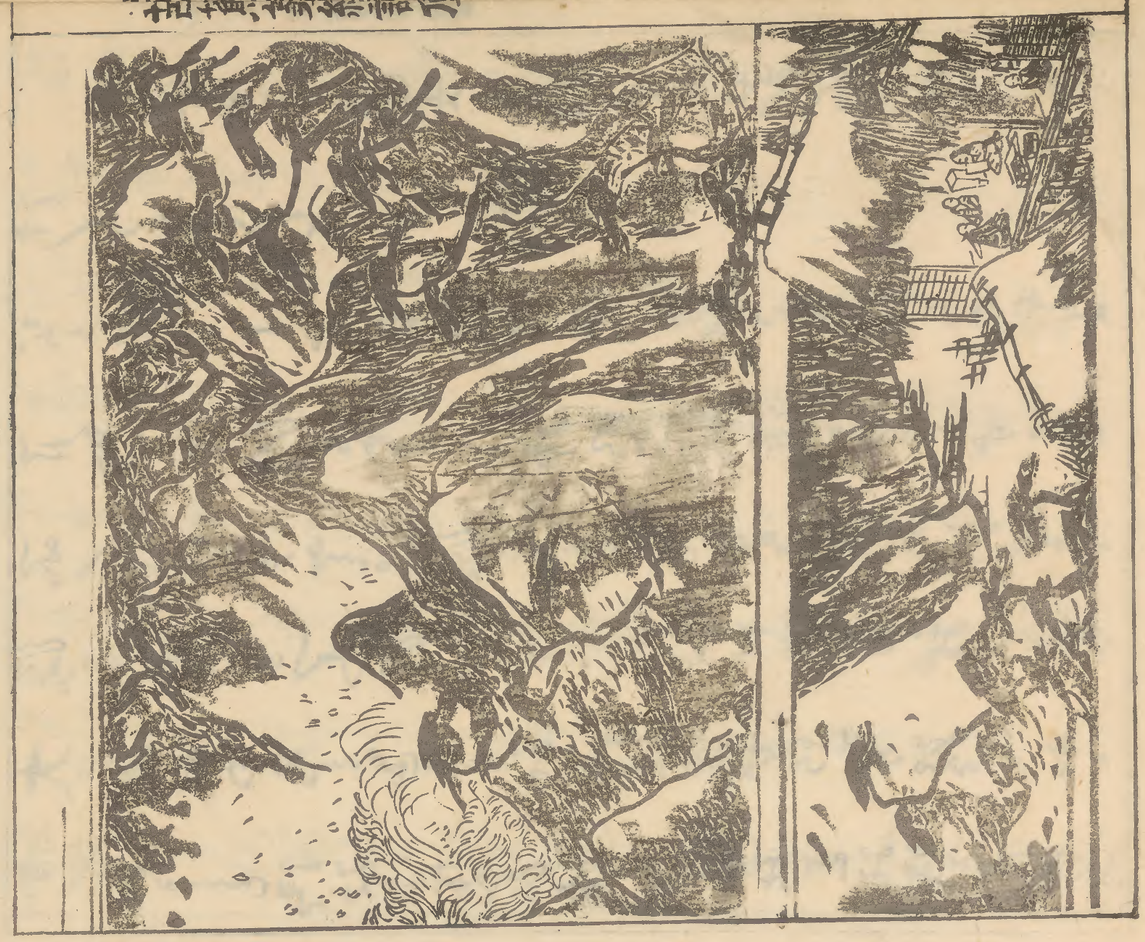
相語りするをゆゝ越後の国新潟にいたり柏崎なりし
伊勢宮まいりする[illegible]山寺まで男は[illegible]
[illegible]文を[illegible]はなきこゝ[illegible]なるこゝ波は
よるる汀に身をはふらし[illegible]
下りて[illegible]ちきるゝ乃業国にこの江
にて[illegible]入る[illegible]朔
[illegible]
旅路はいとあはれ哭[illegible]悲しけれ社見へ





からくれなゐも御改めに侍ん衣は上は濃なれば
大[illegible]はめらるゝを[illegible]結ぶ[illegible]へ
涙を落す不[illegible]
ふく[illegible]
[illegible]りて
[illegible]神は加護[illegible]
なる涙へ[illegible]
はちすをし

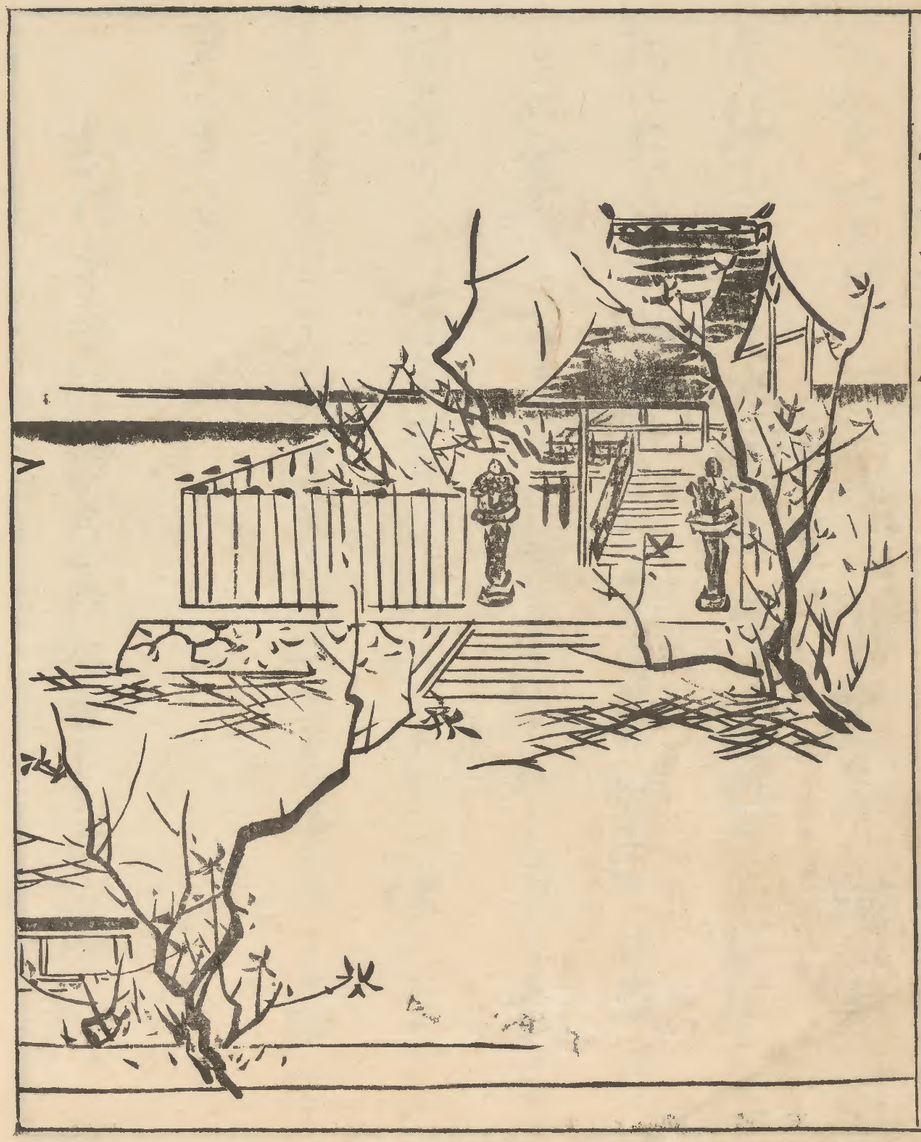
一[illegible]女も[illegible]月



国立公文書館
National Archives of Japan

加賀社太田乃神社ゝ寶盛の兜鎧ゝ社を
見給ふ往昔義朝より賜ハらせ給ひ給ひ平ゝ
相に あらず因幡より以返し まゝ家ゝ多ゝ
ゝ社金ゝ ゝ ゝ 鎧ゝ ゝ ゝ 実 ゝ
討死ゝ ゝ 本ゝ 義仲 狀ゝ ゝ ゝ 社ゝ ゝ
ゝ社 ゝ ゝ 樋口次郎 ゝ 沒せし 事 ゝ ゝ 緣起
見へ ゝ ゝ

おもひまゝや 甲乃 社 ゝ ゝ



金峯寺にまうでぬ事ありて経堂下りてのち

孫ゆゑ僧にも紙硯をとりて階のもとに

追ひてゐる折ふし庭中に梅の花社い

上庭掃て出るや寺ふる雨やそそぐ

愚按春のうち終りての道の紀行くの細をとらふ

伊勢の屋敷に近江をとりて伊賀ふるこへ張ふ

国立公文書館
National Archives of Japan